令和3年度　外国語部会研究計画

１　研 究 主 題
コミュニケーションを図る素地及び基礎となる資質・能力を育む小学校外国語教育

２　研究主題設定の理由

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により，社会構造や雇用環境が大きく，急速に変化する予測困難な時代には，様々な資質・能力が必要となる。特に，一人一人が持続可能な社会の担い手として，その多様性を原動力とし，質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されている。このような中，学校教育には，子供たちが様々な変化に積極的に向き合い，他者と協働して課題を解決していくことや，様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成しながら新たな価値につなげていくこと，複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。令和２年度より全面実施となった学習指導要領では，これからの時代を生きる子供たちに必要な資質・能力を育成するために，「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら授業の創意工夫や充実を目指し，全ての教科等において目標及び内容が次の三つの柱で再整理された。

①　何を理解しているか，何ができるか（知識及び技能）
②　理解していること・できることをどう使うか（思考力，判断力，表現力等）
③　どのように社会・世界とかかわり，よりよい人生を送るか（学びに向かう力，人間性等）

学習指導要領では，全ての教科等において，これらの目標に準拠した観点で評価をするとともに，「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善が求められている。

外国語教育に関しては，グローバル化が急速に進展する中で，外国語によるコミュニケーション能力が，生涯にわたる様々な場面で，これまで以上に必要とされることが想定され，その能力の向上が課題となっている。平成 23 年に小学校高学年に導入された外国語活動は，子供たちの活動への高い意欲や中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果を上げた。その一方で，音声中心で学んだことが中学校段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていないこと，高学年の発達段階に応じた体系的な学習がより求められていること，学年が上がるにつれて子供の学習意欲が低下すること等の課題が指摘された。これらの成果と課題を踏まえ，小学校中学年から外国語活動，高学年から外国語が導入されることとなった。このことにより，音声中心の外国語活動から，「読むこと」「書くこと」を加えた外国語への接続を小学校の段階で行った上で，中学校外国語教育への接続を図ることとなる。さらに，小学校中学年から高等学校卒業時までの一貫した目標と教育内容が明示され，これまで以上に系統的・体系的な指導が求められるようになった。今後，小学校で外国語教育を進める上でも，将来の子供の姿を見通した外国語教育がより一層重要になる。「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」及び小学校における「外国語教育の目標」は次のようになっている。

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方		
外国語で表現し伝え合うため，外国語やその背景にある文化を，社会や世界，他者との関わりに着目して捉え，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて，情報を整理しながら考えなどを形成し，再構築すること		
外国語教育の目標		
	外国語活動（３・４学年）	外国語（５・６学年）
目標	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，話すことの言語活動を通して，コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通して，コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
（１）知識及び技能	外国語を通して，言語や文化について体験的に理解を深め，日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	外国語の音声や文字，語彙，表現，文構造，言語の働きなどについて，日本語と外国語との違いに気付き，これらの知識を理解するとともに，読むこと，書くことについて慣れ親しみ，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
（２）思考力，判断力，表現力等	身近で簡単な事柄について，外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，身近で簡単な事柄について，聞いたり話したりするとともに，音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり，語順を意識しながら書いたりして，自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。
（３）学びに向かう力，人間性等	外国語を通して，言語やその背景にある文化に対する理解を深め，相手に配慮しながら，主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め，他者に配慮しながら，主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは，外国語でコミュニケーションを行う中で物事を捉える視点や考え方のことである。外国語で他者とコミュニケーションを行うには，社会や世界との関わりの中で事象を捉えたり外国語やその背景にある文化を理解したりするなどして相手に十分配慮することが重要となる。さらに，外国語で表現し伝え合うためには，適切な言語材料を活用し，思考・判断して情報を整理するとともに，自分の考えなどを形成，再構築することが大切になる。この「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせ，中学年では，聞くこと，話すことの言語活動を通したコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を，高学年では，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通したコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を養っていくことになる。ここでいう言語活動とは， 実際に外国語を使って自分の考えや気持ちを伝え合う活動のことであり， 言語材料について理解したり練習したりするための活動とは区別されている。こうした外国語教育の目標達成に向けて，聞くこと，読むこと，話すこと[やり取り]，話すこと[発表]，書くことに関する具体的な目標が次のように示された。

５つの領域別の目標			
外国語活動（３・４年）			外国語（５・６年）
聞くこと		ア　ゆっくりはっきりと話された際に，自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取るようにする。 イ　ゆっくりはっきりと話された際に，身近で簡単な事柄に関する基本的な表現の意味がわかるようにする。 ウ　文字の読み方が発音されるのを聞いた際に，どの文字であるかが分かるようにする。	ア　ゆっくりはっきりと話されれば，自分のことや身近で簡単な事柄について，簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるようにする。 イ　ゆっくりはっきりと話されれば，日常生活に関する身近で簡単な事柄について，具体的な情報を聞き取ることができるようにする。 ウ　ゆっくりはっきり話されれば，日常生活に関する身近で簡単な事柄について，短い話の概要を捉えることができるようにする。
読むこと			ア　活字体で書かれた文字を識別し，その読み方を発音することができるようにする。 イ　音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする。
話すこと	やり取り	ア　基本的な表現を用いて挨拶，感謝，簡単な指示をしたり，それらに応じたりするようにする。 イ　自分のことや身の回りの物について，動作を交えながら，自分の考えや気持ちなどを，簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うようにする。 ウ　サポートを受けて，自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について，簡単な語句や基本的な表現を用いて質問をしたり質問に答えたりするようにする。	ア　基本的な表現を用いて指示，依頼をしたり，それらに応じたりすることができるようにする。 イ　日常生活に関する身近で簡単な事柄について，自分の考えや気持ちなどを，簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする。 ウ　自分のことや相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について，簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして，伝え合うことができるようにする。
	発表	ア　身の回りの物について，人前で実物などを見せながら，簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。 イ　自分のことについて，人前で実物などを見せながら，簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。 ウ　日常生活に関する身近で簡単な事柄について，人前で実物などを見せながら，自分の考えや気持ちなどを，簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。	ア　日常生活に関する身近で簡単な事柄について，簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。 イ　自分のことについて，伝えようとする内容を整理した上で，簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。 ウ　身近で簡単な事柄について，伝えようとする内容を整理した上で，自分の考えや気持ちなどを，簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。
書くこと			ア　大文字，小文字を活字体で書くことができるようにする。また，語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。 イ　自分のことや身近で簡単な事柄について，例文を参考に，音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。

全面実施となった昨年度は，中学年，高学年で目指す目標を理解した上で，目標達成につながる実践を行い，それぞれの資質・能力の育成を目指した。中学年の外国語活動（活動型）から高学年の外国語（教科型）への接続を小学校内で行うため，それぞれの目標・内容をしっかりと確認し，実践することが重要だからである。しかし，新しい外国語教育についての理解は十分ではない。そこで，外国語活動，外国語について理解を深めることで授業の充実を実現し，それぞれの資質・能力の育成を目指したいと考え，今年度の研究主題を「コミュニケーションを図る素地及び基礎となる資質・能力を育む小学校外国語教育」と設定した。

３　研究主題について

コミュニケーションを図る素地及び基礎となる資質・能力とは，外国語活動・外国語で育成すべき資質・能力を指す。この資質・能力を育成するためには，「外国語によるコミュニケーションにおける，見方・考え方」を十分に踏まえ，「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力・人間性等」それぞれに関わる外国語特有の資質・能力を育成する必要がある。

〇コミュニケーションを図る素地となる資質・能力

「知識及び技能」では，実際に外国語を用いた言語活動を通して言語や文化について体験的に理解を深め，日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことを目指す。ここでは，日本語との違いや言葉の面白さ，日本と外国との生活習慣や行事の違い，多様な考えがあることなどを体験的に理解させることが大切である。また，言語を用いてコミュニケーションを図る楽しさや大切さを実感しながら，英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことができるよう工夫したい。

「思考力，判断力，表現力等」では，具体的な課題を設定し，コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，身近で簡単な事柄について，外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力を目指す。ここでは，子供がよく知っている人や物，事柄を扱い，簡単な語彙や基本的な表現を用いて自分の考えや気持ちを伝え合うようにする。子供がもっている表現が限られていることを十分に考慮した上で，自分で適切な表現を選び，自分の考えや気持ちを伝えられるよう配慮する必要がある。

「学びに向かう力，人間性等」では，外国語を通して，言語やその背景にある文化に対する理解を深め，相手に配慮しながら，主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。ここでは，「知識及び技能」及び「思考力，判断力，表現力等」の資質・能力を一体的に育成する過程を通して育てる必要がある。「知識及び技能」を実際のコミュニケーションの場面において活用し，考えを形成・深化させ，話して表現することを繰り返すことで子供たちに自信が生まれ，主体的に学習に取り組む態度が向上するからである。子供が興味をもって取り組むことができる言語活動を易しいものから段階的に取り入れたり，自己表現活動の工夫をしたりするなど，様々な手立てを通じて子供たちの主体的に学習に取り組む態度の育成を目指すことが大切である。

中学年では，初めて外国語に触れる段階であることを配慮し，外国語でコミュニケーションを図る楽しさや，世界には様々な言語や文化があることを知る楽しさを実感させたい。中学年の外国語活動で音声によるコミュニケーションを十分に図っておくことが，高学年以降の外国語学習の動機付けになることを心に留めておきたい。

〇コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力

「知識及び技能」では，実際に外国語を用いた言語活動を通して，外国語の音声や文字，語彙，表現，文構造，言語の働きなどについて，日本語と外国語の違いに気付き，これらの知識を理解するとともに，読むこと，書くことについて慣れ親しみ，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けることが目指される。高学年の外国語では，日本語との音声の違いにとどまらず，文字や言語の働きなどについての気付きを生きて働く知識として理解し，外国語でコミュニケーションを図る際に活用することが求められている。

「思考力，判断力，表現力等」では，コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，身近で簡単な事柄について，外国語で聞いたり話したりするとともに，音声で十分に慣れ親しんだ語句や基本的な表現を推測しながら読んだり，語順を意識しながら書いたりして，自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる力を養うことが求められる。ここでは，コミュニケーションを行う目的や場面，状況などを意識した上で，子供がよく知っている人や物，事柄について推測して聞いたり，表現を選択して話したり，音声で慣れ親しんだ語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり，語順を意識しながら書いたりして，自分の考えや気持ちなどを伝え合うことが重要になる。中学校において日常的な話題や社会的な話題を外国語で伝え合うことができるようにするためには，小学校段階で身近で簡単な事柄について十分にコミュニケーションを図っておくことが必要である。

「学びに向かう力・人間性等」では，外国語の背景にある文化に対する理解を深め，他者に配慮しながら，主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことを目指す。この観点は，極めて重要な観点として挙げられている。子供たちが，コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を身に付けるためには，言語活動に主体的に取り組むことが不可欠だからである。外国語活動同様，「知識及び技能」を実際のコミュニケーションの場面において活用し，考えを形成・深化させながら話したり書いたりする活動を繰り返すことで，子供たちの自信につなげ，主体的に学習に取り組む態度の向上を目指したい。

高学年の外国語では，聞くこと，話すことについては定着が求められ，読むこと，書くことの内容が取り入れられた。子供が負担に感じることのないよう，実態に合わせた活動内容を考えたり，他者意識，目的意識を明確にもたせたりして，外国語を学ぶ楽しさや意義を実感させたい。活動型で培ったコミュニケーションを図る素地となる資質・能力の上にコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力をしっかりと育み，中学校外国語の礎としたい。

４　研究の内容

(1)　各校の実態に応じた年間指導計画等

学習指導要領において，外国語活動では，「外国語活動の目標」と「三つの領域別の目標」が，外国語では，「外国語の目標」と「五つの領域別の目標」が示されている。これらは，中学年，高学年のそれぞれ２年間を通した目標となっているため，各学年ごとの目標と各領域別の目標を各校の実態に応じて設定することになる。後者は，「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標のことである。同時に，目標に応じて，学年ごとに領域別の評価規準を設定し，これらを受けて，単元ごとの目標と評価規準を領域別に定め，実践していくこととなる。

高学年においては，教科書を使用しており，教科書会社の指導書には，年間指導計画等も示されている。しかし，それをそのまま使うのではなく，年間を通して育てたい子供の姿を明確にし，子供の実態や地域・学校の特色に合わせて単元の配列を考えたり，工夫したりする必要がある。子供の学びを滑らかにつなげるためにも，目標達成に向けて，子供の意識の流れや実態をしっかりと把握し，今までの外国語活動で培ってきたよさを生かしながらカリキュラムマネジメントを行い，効果的で無理のない計画を立てることが大切である。その際には，ICT を効果的に活用し，主体的・対話的で深い学びの実現が図られているか，簡単な語句や基本的な表現を用いながら，互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動が盛り込まれているかについて確認したい。

(2)　目指す資質・能力を育成する授業の在り方

外国語学習においては，語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく，学びの過程全体を通して，知識・技能が実際のコミュニケーションにおいて活用され，思考・判断・表現することを繰り返すことで獲得され，学習内容の理解が深まるなど，資質・能力が相互に関係しあいながら育成されることが必要である。そのため，自分の考えや気持ちを伝え合う言語活動は，単元終末のみに行うのではなく，単元全体を通して行っていくことが大切である。

中学年において言語活動を充実させるためには，子供が興味・関心をもつ題材を扱い，聞く活動を十分に取り入れた上で，必然性のある体験的な活動を設定することが大切である。中学年において十分に聞いたり話したりする経験をしておくことが，高学年の外国語における五つの領域の言語活動につながることとなる。

高学年においては，中学年の外国語活動での学びを生かした言語活動が展開される。単に繰り返し活動を行うのではなく，子供が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して行うことができるよう，具体的な課題を設定し，その目的を達成するために，必要な表現を取捨選択して活用できるようにすることが必要である。

〇聞くこと・話すことにおける言語活動

聞くこと・話すことの言語活動を充実させるための活動の一つとして，Small Talk が挙げられる。研修ガイドブックによると，Small Talk の主な目的は二つある。①既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること，②対話の続け方を指導すること，である[1]。

高学年で行う外国語では，聞くこと，話すことにおいて定着が求められる。指導者や子供が自分自身に関する本当の出来事や気持ちなどをやり取りする中で，子供が現在学習している単元及びこれまで学習した語彙や表現を繰り返し使用する機会を保障し，一層の定着を目指す。また，話すことのコミュニケーションを行う際に欠かせないのが「対話を続けるための基本的な表現」である。対話の開始や終了の挨拶，繰り返しや一言感想，確かめたり質問したりする表現を繰り返し使用することで，自然なやり取りができるようになると考えられる。

また，うまく伝わらなかった言葉や表現などを全体で共有し，既習の言語材料から使える表現を導き出したり，別の言い方を考えたりする時間をもつことが必要である。さらに，自分の対話を振り返ったり，相手を替えて自己調整しながら繰り返したりすることも大切である。

なお，Small Talk をする際には，子供の実態に合わせ，指導者同士，指導者と子供，子供同士等の段階を考慮する必要がある。

〇読むこと・書くことにおける言語活動

子供が主体的に読んだり書いたりしようとする態度を育成するためにも，自分自身や友達のことなど，簡単で身近な事柄について，目的をもって読んだり書いたりする活動を取り入れることが大切である。同時に，子供が過度な負担を感じないよう，スモールステップで学習を進めることが重要である。また，書くことについては，英語の語順に気付いたり，語と語の区切り等に注意して書き写したりすることができるよう配慮する必要がある。

文字を扱う際には，音声中心の活動の中に文字に触れる場を設定する等，子供たちが文字に親しみ，読んだり書いたりすることに自然と気持ちが向かうような工夫が必要である。活動の意味や目的をしっかりと理解させた上で，音声に十分に慣れ親しみ，必然性を感じているものについて丁寧に指導したい。

なお，読むこと，書くことに関して，困難を感じる子供がいることも想定されるため，個に応じた教材の工夫や支援が望まれる。

(3)　評価

○基本的な考え方

学習評価の基本的な考え方としては，次の３点が挙げられている[2]。

① 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
② 教師の指導改善につながるものにしていくこと
③ これまで慣行として行われていたことでも，必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

子供たち自身が自らの学びを振り返り，次の学びに向かうことができるような評価にするために，指導者は「何のための評価なのか」を再確認し，授業のねらいがどこまで達成されたかだけではなく，子供たち一人一人が，前の学びからどのように成長し，より深い学びに向かっているかを捉えることが大切である。指導者によって評価の捉え方に偏りがないよう，何を，どこで，どのように評価するのか，研究を進めるとともに共通理解を図る必要がある。そのためにも，記録に残す場面を精選し，かつ適切に評価するための評価計画を立てることが重要である。

○内容と方法

学習評価の基本的な枠組みは，図１のようになっている[3]。

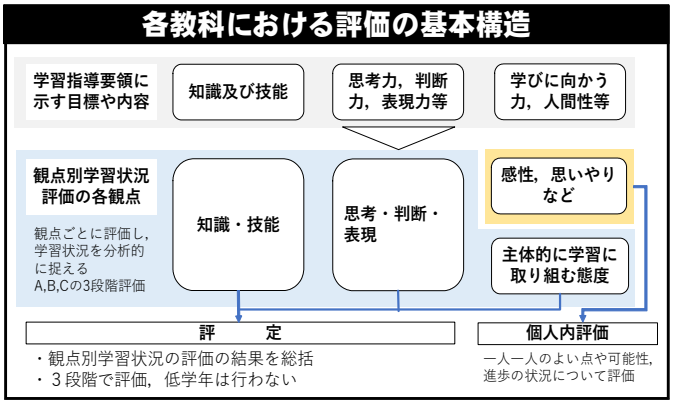

図1:学習評価の基本的な枠組み

「知識・技能」では，英語の特徴やきまりに関する事項を理解しているかどうか，それらを実際のコミュニケーションにおいて，活用する技能を身に付けているかどうかを評価する。学習初期段階においては，努力を要すると判断される状況になりそうな子供を見出し，おおむね満足できる状況となるよう適切な指導を行うことが大切である。

「思考・判断・表現」では，子供がコミュニケーションの目的や場面，状況などに応じて，既習語句や表現を使って，話される内容を理解したり，自分の考えや気持ちを表現したりしているかどうかを評価する。そのため，学習過程において，普段から指導者と子供，子供同士で既習語句や表現を使って常にやり取りする場面を設定しておくことが大切である。

「主体的に学習に取り組む態度」では，子供が英語を使って自分の考えや気持ちを伝え合うことの楽しさや言葉の大切さを実感しながら粘り強く学習に取り組み，問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を身に付けているかどうか，また，必要な場面で自ら英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けているかどうかを評価する。したがって，挙手の回数など，形式的な側面で評価をするのではなく，学習過程において自己調整を行っている側面を捉えて評価することが大切である。つまり，本観点においては，① 知識及び技能を獲得したり，思考力，判断力，表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と，② ①の粘り強い取組を行う中で，自らの学習を調整しようとする側面，という二つの側面を評価することが求められる。よって，本観点の評価の場面は，「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点に関わる評価の場面と共にあり，本観点のみを取り出しての評価を行うことはない。さらに，学習活動を通して身に付けた態度を評価するため，単元の導入時に評価したり，１単位時間の授業の冒頭で評価したりすることは適さない。

「外国語活動の記録」については，評価の観点を記入した上で，それらの観点に照らして，子供の学習状況に顕著な事項がある場合にその特徴を記入するようになっている。一方，教科である高学年外国語では，他教科同様，観点別学習状況の評価と，これらを総括的に捉える３段階の評定を付ける必要がある。そこで，高学年においては，「内容のまとまり（五つの領域）ごとの評価規準」や「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を踏まえ，単元（題材）における観点別学習状況の評価をすることになる。その進め方の一例は次のようになっている[4]。

１　単元の目標を作成する	・学習指導要領の目標や内容，学習指導要領解説等を踏まえて作成する。
２　単元の評価規準を作成する	・児童の実態，前単元までの学習状況等を踏まえて作成する。
３　「指導と評価の計画」を作成する	・１，２を踏まえ，評価場面や評価方法を計画する。 ・どのような評価資料を基に，「おおむね満足できる」状況（B）と評価するかを考えたり，「努力を要する」状況（C）への手立て等を考えたりする。
＜授業を行う＞	・３に沿って観点別学習状況の評価を行い，児童の学習改善や教師の指導改善につなげる。
４　観点ごとに総括する	・集めた評価資料やそれに基づく評価結果などから，観点別の総括評価を行う。

詳しくは，『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　小学校　外国語・外国語活動』（国立教育政策研究所：令和２年６月）第２編，第３編を参考にされたい。

方法としては，従来の振り返りカードの分析や行動観察に加え，パフォーマンス評価（インタビュー，発表，ワークシートや作品等の記述）等がある。多様な評価方法から子供の学習状況を評価できる方法を選択し，多面的・多角的に評価することが重要となる。

(4) 接続と連携

学習指導要領の下では，小中高の目標や内容の系統性が図られた。小学校内では外国語活動と外国語の接続が求められる。中学年では，活動内容がどのように高学年の教科につながるかを意識して授業をすること，高学年では，どのような活動内容を経て今に至るのかを理解した上で授業を進める必要がある。同時に，中学校との連携はこれまで以上に重要である。小学校においては，中学校の授業内容にどのようにつながっていくのかを意識し，小学校での子供たちの学びの過程について中学校の先生にしっかりと伝える必要がある。

子供たちの学びをスムーズにつなげ，学習内容の定着を効果的に進めるためにも，グローバル社会の中で生きる子供たちの将来を見据え，共通の目的意識をもち，指導者が系統的な指導を続けることは大変重要である。まずは近隣の小学校間で，そして地域の小・中学校間で授業参観や研究会を通して情報交換や交流を行い，連携を進めていきたい。さらに，学習指導要領が示す目標に沿った授業づくりについて各校が実践研究を進めるとともに，交流を続けることで互いの理解を深め，将来的にはそれらを共有し，外国語教育における学校間の円滑な接続について検討していくことが大切である。連携は一朝一夕にできるものではないが，管理職や教育委員会のリーダーシップの下，進めていく必要がある。

５　研究の進め方

(1)　各郡市の実態に応じ，個人または協同で研究を進める。
(2)　研究した内容を研究集録にまとめる。
(3)　夏季研修会で実践的な研究を深める。　7 月 29 日トモニプラザにて開催予定
(4)　統一大会(鳴門市板東小学校)　　11 月 19 日

引用・参考文献

文部科学省：小学校学習指導要領解説　外国語活動編・外国語編(平成 29 年 6 月)
文部科学省：小学校外国語活動・外国語　研修ガイドブック(平成 29 年 6 月)
中央教育審議会　初等中等教育分科会　教育課程部会：
児童生徒の学習評価の在り方について（報告）(平成 31 年 1 月)
文部科学省：小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善について（通知）(平成 31 年 3 月)
国立教育政策研究所：「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校　外国語・外国語活動】(令和 2 年 6 月)

1　小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック　p84
2　「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　小学校　外国語・外国語活動　p5
3　「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　小学校　外国語・外国語活動　p8
4　「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　小学校　外国語・外国語活動　p37